

機関番号：32680

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20730557

研究課題名(和文) 対外認識育成をはかる外国史教育の内容構成原理に関する日独比較研究

研究課題名(英文) Research for the Principle of Contents Arrangement in Foreign History Education in Japan and German to Bring up the Abroad Recognition.

研究代表者

佐藤 公 (SATO KO)

武蔵野大学・文学部・准教授

研究者番号：90323229

研究成果の概要(和文)：

対外認識育成をはかるためには、人間活動の全体を描こうとする「文化史」や「社会史」研究成果として描かれた歴史的事実に加え、描出する方法と共に歴史学習の内容構成原理とすることが有効である。自国以外の国家・地域の歴史を学ぶ体系として構想された教科「世界史」は、国家史や政治体制史という枠組みを超えた歴史内容構成原理に基づき、19世紀末から世紀転換期の日本およびドイツで検討された。その動きは、学説研究の深まり・教材としての教科書作成・教科書の使用状況に表れていた。

研究成果の概要(英文)：

It is effective approach for the abroad recognition in foreign history education to apply the outcome of "cultural history" and "social history" with its methodology to the principle of contents arrangement in foreign history education. At the end of 19<sup>th</sup> and the first of 20<sup>th</sup> century, a subject "world history" was considered as the way of contents arrangement that differed from "national history" or "history of political institutions" in Japan and German. This movement in both countries was showed in academic interchange with historians and educator, textbooks and statistical status of publication.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教育学、社会科、歴史教育、外国史、ドイツ、社会史、文化史、普遍史

## 1. 研究開始当初の背景

日本の社会科教育学及び歴史教育学研究は、我が国の伝統と文化、郷土を愛する態度

養成と共に、国際理解・国際協調の視点に立ち国際社会の平和的発展を支える資質育成を目指す教育実践の創造に取り組んでいる。しかしながら、国内外において、近年再び繰り返されている歴史教科書問題や靖国神社参拝をめぐる軋轢を例にとっても明らかのように、歴史認識に関する相互理解めぐり多くの論争が熾り続けている。このような社会情勢のもと、主に日本以外の国・地域の歴史を学習内容として扱い、対外認識の育成を通じ国際理解を進める上で外国史教育、すなわちその役割を担う中核的な教科目「世界史」教育に課せられた役割は、ますます大きなものとなっている。

このような課題を持った「世界史」教育のあり方を、日本とドイツの歴史教育・歴史学説史研究成果との関連に基づき考えたとき、「東洋」「西洋」の二分法から脱却し「世界」を一体のものとしてとらえようとした対外認識に基づく外国史教育が、政治体制の成立と変遷を捉えたいわゆる国家史ではなく、新しい歴史像の構築とそれに関わる論争を展開していた当時の歴史学説研究との関係性にもとづき成立したのではないか、という研究仮説を着想するに至った。「国家」という枠組を越える歴史学領域における研究関心こそ、「東洋」「西洋」といった所与の歴史的観点を「世界」という新たな観念に立たせることになったのではないかと考えた。

つまり、本研究は、日本とドイツの間に見られた歴史学説史研究の関連を、歴史教育学研究との関連性にまで広げて考察し、双方の研究成果による相互影響や交流の様子を解明することをめざす。そして、明らかにされる歴史学説史研究と歴史教育内容の相関は、現在、そして新時代の国家・社会の形成者となる児童生徒の資質育成をはかる外国史教育の学習内容の選択と排列、すなわち内容構成原理のあるべき姿を追究する知見を基礎づけるものとなる。

## 2. 研究の目的

本研究は、国家・社会の形成者としての資質育成をはかる社会科教育に対する現代的要請に応えるため、対外認識育成をはかる外国史教育の内容構成原理を明らかにする基礎的研究である。

具体的には、日本とドイツの歴史教育学において、歴史学説史研究が導き出した成果やそれが有していた研究手法はいかにして歴史教育学研究へ導入されたのか、特に対外認識育成をはかる外国史教育の有する学習内容やその選択・排列のあり方に関する変化の過程と、実際にもたらされた影響や成果への考察を通じて解明していくことにある。

## 3. 研究の方法

本研究の方法的特徴は、地域性（日本とドイツ）と研究分野（歴史学と歴史教育学）という二つの比較の視点を設定し、当時の研究者が有した思想的関連を横断的に捉える構造を有する。

第一に、明治後期から昭和初期にかけて変化・発展した日本及び同時期ドイツの歴史学説史研究及び歴史教育学研究の成果とその相互関連のあり方について、歴史学説論争における争点となった「文化史」概念が有する新しさとその限界・さらに「社会史」概念への影響等を明らかにした上で、それぞれの課題と実践を整理する。

第二に、歴史学と歴史教育学の相互関連を確認するものとして、ドイツ留学を行った歴史学・歴史教育学に関係する人物に焦点を当て、同時期の両国間の学説・学術交流が実際に与えた影響や相関を教授活動レベルで確認していく。

なお、ドイツ歴史学及び歴史教育学に関する資料収集・分析等の調査研究活動は、教科書研究施設であるゲオルク・エックハート国際教科書研究所(Georg Eckert Institut)や書籍見本市であるフランクフルト・ブックフェア(Frankfurt Book Fair)、さらにライプツィヒ大学(Universität Leipzig)及びライプツィヒ大学公文書館(Universitätsarchiv Leipzig, 以下UAL)にて行う。さらに、同大学に「文化史・普遍史研究所」を設立したカール・ランプレヒト(Karl Lamprecht)が提唱した「文化史」概念に関して、考察対象時期に刊行された文献史料や先行研究に関する史資料を検索、調査、収集した。各機関では、歴史教科書や教材等、歴史教育実践に関する基本文献や先行研究、実践事例等の史資料を広く検索、調査、収集する。

これら活動に支えられた方法的特徴は、以下の4点に整理される。

(1) 日本・ドイツの国民国家成立を支えた歴史教育学の有する目的・内容・方法の解明。考察時期において日本とドイツの歴史教育学が有していた特色のうち、近代的国民国家の成立と維持に関する教授目的設定、教授内容の選択・排列、教授方法等、教授活動の具体像を解明する。

(2) 「ドイツ歴史学論争」における「文化史」及び「社会史」概念の解明。近代国民国家における政治地理的観念に基づいた歴史叙述のあり方を越えて、人間活動の全体像を描き出そうとする「文化史」概念が克服しようとした歴史学的課題とともに、もたらされた成果と課題に関して整理検討する。

(3) 日本に移入されたドイツ歴史学説研究における「文化史」及び「社会史」概念の受容と影響の解明。「文化史」をめぐるドイツ歴

史学論争を手がかりとして、その歴史学説の思想や特質、また歴史的意義を明らかにし、当時の日本の歴史学及び歴史教育学双方への影響を明らかにする。

(4) 歴史学研究や歴史教育学研究を通じた人物相互間の関係、日本の歴史教育学への影響解明。ドイツにおける歴史学説論争に関わった歴史学研究者と日本人研究者との学術的交流に着目し、歴史学説が日本にもたらされた過程や媒介物、それらの歴史教育学及び歴史教育内容との相関について明らかにする。

#### 4. 研究成果

研究成果を目的及び方法に即して整理すれば、以下ようになる。

(1) 19世紀末から世紀転換期のドイツで使用されていた歴史教科書より、歴史学研究と歴史教育の一断面を示す教科書との接続について、教科書執筆者を基軸とした関連性を確認できた。特に、歴史学領域における研究関心であった「国家」を代替する対外認識育成の枠組みとして、中等教育機関における教科書および教科書記述の構成や内容には「世界史 (Weltgeschichte)」並びに「文化史 (Kulturgeschichte)」が取り入れられていた。

さらに、この状況を、20世紀転換期前後のドイツ・プロイセン各地域及び各学校段階の教育課程を記録した教授活動計画 (Lehrplan) や、当時のドイツ各州での教科書採用状況と合わせて整理した。これらの資料により、すでに調査を実施している歴史教科書の内容的考察に加えて、教科書の使用状況を加味することで、当時の歴史教育に関する状況をより具体的かつ多角的に考察可能となった。

(2) 歴史学習への「文化史」そして「社会史」の導入は、国家史や政治史にはあらわれない、圧倒的多数の「庶民」の人間活動を描くためには有用である。特にそれは、描かれた歴史的事実そのもの以上に、その描出する方法が歴史学習として有用であることを指摘した。

「文化史」そして「社会史」の学習方法については、政治史には現れない多様な資料や記録が必要となる。このような歴史を学習材料とするための工夫を考察するため、主たる教材たる教科書での記述内容とその学習指導のあり方について、現在のドイツ歴史教科書の記述内容や副教材等の調査を行った。そして、ドイツ歴史教育における「社会史」的のあり方を、「教師用指導書」に示された歴史教育内容と教授活動の構成という観点から考察した。「社会史」を用いた歴史学習の成果とは、学習者が自ら歴史的世界像を獲得するための方法と史料考証の手法、そして判断力を身につけることであり、歴史的世界と現代社会との繋がりについて課題意識を探

究しうる基礎的な資質を育成している旨を指摘した。

さらに、ドイツでの歴史学と歴史教育の関係、新しい歴史学説としての「社会史」の成立とその特徴、そして歴史教育内容構成への影響という観点から考察した。論文では、歴史的視点と史資料の拡大をもたらした「社会史」が、歴史教育の場においては学習方法としても有効性をもちえたとの結論を得た。(3) 世紀転換期ドイツの歴史教育の特徴を形作ると同時に、その変容を支えた中等教育制度改革について、経済的発展に支えられた中等教育段階の拡充の方策と、歴史学習内容に関しては性差による相違が顕著に見られたことを指摘した。

当時のドイツでは、中等教育機会の拡大とその改革が男女の同権化を目指しながらも、根強い性別役割分業の思想から離れることができなかったため格差の保存を前提とした改革にとどまった。特に歴史教育では、女性の有する「妻・母・主婦」としての使命や役割モデル獲得に必要な道徳的側面が重視された。そのため、産業化の進行に合わせ就業や経済的自立が必要だった社会的状況にもかかわらず、女性の自然科学に関する知識へのアクセスは非常に限られたままとなっていた。

(4) 日本の歴史教育学研究では、「文化史」概念に関して、これが歴史学と歴史教育学の相互関連を確認するものとして指摘した。これは、考察対象時期において、三浦新七や齋藤斐章といったドイツ留学を行った歴史学・歴史教育学に関係する人物に焦点を当てて論じた、歴史学説史・歴史教育史研究に関する史資料の収集及び分析を行った成果である。

具体的には明治30年代の外国史教育の現状と課題を一科目「東洋史」から再検討し、戦前期を通じた外国史教育の変化の中に位置づけることを試みた。結論としては、当時代表的な歴史教育者であった齋藤により提唱された「東洋史削除案」が、外国史に関する教授内容の選択・排列に関する方策をめぐり打ち出された改善案の具現であり、かつ以後展開される「世界史構想」の端緒として指摘しうるものでもあることが確認された。この成果は、明治後期から昭和初期にかけて議論となる、歴史教育者の齋藤斐章が論じた戦前期の一科目「世界史」をめぐる議論の出発点とその論争点に関する研究として整理した。

なお、明治後期から昭和初期にかけて変化・発展した日本及び同時期ドイツの歴史学説史研究及び歴史教育学研究の成果とその相互関連のあり方についてUALにて調査を行った。しかし、UALは組織移管作業中であったため、同時期の両国間の学説・学術交流が実際に与えた影響や相関については不十分

な考察となった点は否めないが、ウェブ上のアーカイブを通じ、当時ドイツで歴史教育及び歴史学を学んだ三浦新七、新見吉治等日本人留学生の在籍期間や関連講義に関するデータベース調査に取り組んだ。この日本とドイツの学術交流とその相互関係に関する手がかりを具体像解明に活かすことが、本研究の成果もまた活かされることにつながるものとする。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 佐藤公、ドイツ中等歴史教科書にみる「社会史」的視点の導入、武蔵野大学教職課程年報、査読無、第 15 号、2008、16 - 27 頁。
- ② 佐藤公、「教師用指導書」にみるドイツ歴史教育への「社会史」的視点の導入武蔵野大学教職課程年報、査読無、第 16 号、2009、16 - 27 頁。
- ③ 佐藤公、19 世紀ドイツ連邦期における中等教育機会の拡大と女子教育の理念、武蔵野大学教職課程年報、査読無、第 17 号、2010、29 - 40 頁。
- ④ 佐藤公、19 世紀ドイツ第二帝政期における女子中等教育制度改革(1)-改革運動前期(1865~79 年)-、武蔵野大学教職課程年報、査読無、第 18 号、2011、21 - 31 頁。

[学会発表] (計 1 件)

- ① 佐藤公、戦前期の「世界史」教育論-齋藤斐章の歴史教授論と「世界史構想」の検討-、中等社会科教育学会、2009 年 7 月 11 日、筑波大学東京キャンパス(東京都)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

佐藤 公 (SATO KO)

武蔵野大学・文学部・准教授

研究者番号：90323229